日本現存資料から見た宋版大蔵経の〈修〉について

――「入（埋）木」の世界――

牧野和夫

はじめに

版本の追究において〈修〉の問題は避けて通ることのできない枢要な課題である。入木・追雕などの持つ意味は極めて重く、福州版大蔵経の修についても既に以下の報告をおえ、「日本現存宋版大蔵経についての一、二の問題」〈『東亜文化的伝承与揚棄』２０１１年７月　中国書籍出版社〉に「衆縁を募る勧進開始の年月日、版木を刻雕した年月日、施財刊語として版心や尾題後のスペースなどへ追雕・入木などをした年月日、その乖離にこそ、連続して回転資金を廻し継続刊行していく大部な経典（「私版」大蔵経刊行など）の「開版勧進システム」の徴証があり、このシステムこそ北東アジアにおける経典刊行勧進活動のひとつの典型的なシステムではなかったか（日本の場合にも、適用可能なシステム）、と考える。」と「見通し」を記した（ほぼ同じ見通しは、２００４牧野稿で述べた）。

牧野「日本舶載東禅寺版一切経の刊・印・修をめぐる一、二の問題」（『東アジア出版文化研究　にわたずみ』２００４・３　二玄社刊）

同「宋刊一切経に関する一、二の問題―我邦舶載東禅寺版の「刊・印・修」の問題を軸に―」（『実践国文学』73号　２００８・３）

同「開元寺版大蔵経の〈修〉の世界についての一、二の問題―墨丁追刻と題記入木―」（『実践国文学』77号　２０１０・３）

同「高野山金剛峯寺蔵『四分律蔵』（宋版大蔵経ノ内）

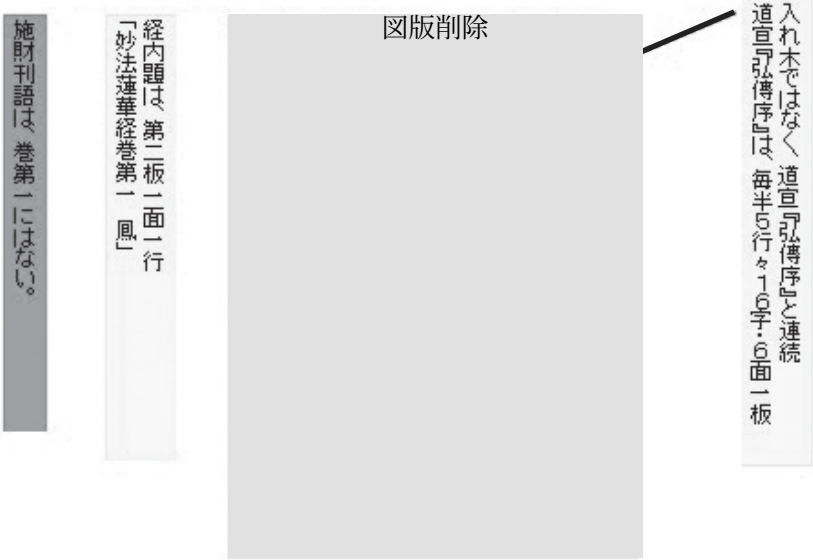
について」（『かがみ』42号　２０１２・３）

一、開元寺版の問題：改削埋木と補刻・事例（一）
―『妙法蓮華経』（千字文番号「鳳」）

第三回宋版研究会（平成24年12月25日　於立正大学）の口頭発表において「改削埋木と補刻の事例（一）『妙法蓮華経』（千字文番号「鳳」）」として報告は済んでいる。ここに概略を記しておくのは、後述の事例（二）と併せて考察すべき資料であるからである。

知恩院蔵宋版大蔵経の内、『妙法蓮華経』巻一は、折帖装。一帖＝18板（版）、毎板6面一紙毎面6行（1板36行）毎行17字。題記三行に連続して道宣撰「弘傳序」が毎半5行々16字で配され、入木の形跡はなく、おそらく第二板一面一行の経題に至る前の第一板分の「弘傳序」は、題記三行も含め一板まるごとの補刻葉であろうか、と思われる。

知恩院蔵：妙法蓮華経巻第一　鳳



板数・面数・柱位置（「1・2」とあれば、第一面と第二面の間を指す。「ナシ」は版心に該当する部分が特にない場合である。「2・5行」は、第二面の五行目を意味する）・柱・刻工名の順に記す。

知恩院蔵妙法蓮華経巻第一　鳳

板	面数	柱位置	柱	刻工名
1	6	ナシ		
2	6	1・2	二	ナシ
3	6	1・2	鳳	一巻
4	6	1・2	鳳	一巻	三	ナシ
5	6	1・2	鳳	一巻	四	ナシ
6	6	1・2	鳳	一巻	五	ナシ
7	6	1・2	鳳	一巻	六	ナシ
8	6	1・2	鳳	一巻	七	ナシ
9	6	1・2	鳳	一巻	八	ナシ
10	5	1・2	鳳	一巻	九	ナシ
11	6	2・3	鳳	一巻	十	ナシ
12	6	2・3	鳳	一巻	十一	ナシ
13	6	2・3	鳳	一巻	十二	ナシ
14	6	2・3	鳳	一巻	十三	ナシ
15	6	2・3	鳳	一巻	十四	ナシ
16	6	2・3	鳳	一巻	十五	ナシ
17	6	2・3	鳳	一巻	十六	ナシ
18	3	2・5行	十八岳尾	陳和造（印造記）	十七	ナシ

印面の状態については、1板＝良、4・6・7・11・12板＝やや悪い。巻二～七に存する三行分の施財刊語はない。

知恩院蔵宋版大蔵経ノ内、千字文番号「鳳」『妙法蓮華経』巻四は、以下の通りである。

折帖装・巻四　一帖＝21板（版）、毎板6面毎面6行（1板36行）毎行17字

板	面数	柱位置	柱	刻工名
1	6			
2	6	1・2	鳳	四巻	二	ナシ
3	6	1・2	鳳	四巻	三	ナシ
4	6	1・2	鳳	四巻	四	ナシ
5	6	1・2	鳳	四巻	五	ナシ
6	6	1・2	鳳	四巻	六	ナシ
7	6	1・2	鳳	四巻	七	ナシ
8	6	1・2	鳳	四巻	八	ナシ
9	6	1・2	鳳	四巻	九	ナシ
10	5	1・2	鳳	四巻	十	ナシ
11	6	2・3	鳳	四巻	十一	ナシ

印面かなり悪

12　6　2・3　鳳　四巻　十二　ナシ
13　6　2・3　鳳　四巻　十三　ナシ
14　6　2・3　鳳　四巻　十四　ナシ
15　6　2・3　鳳　四巻　十五　ナシ
16　6　2・3　鳳　四巻　十六　ナシ
17　6　2・3　鳳　四巻　十七　ナシ
18　6　2・3　鳳　四巻　十八　ナシ
19　6　2・3　鳳　四巻　十九　ナシ
20　5　1・2　二十
21　2　2・1行　二十尾　陳和造

題記

福州開元禅寺住持伝法賜紫慧通大師了一謹募衆縁恭為
今上　皇帝祝延　聖壽文武官僚資崇　禄位圓成雕造
毘盧大蔵経板一副肯紹興戊辰閏八月　日　謹題
紹興戊辰＝紹興十八年・１１４８

施財刊語

魯國太夫人張氏伏遇
亡夫太傅大丞相李公遠忌之辰謹施浄
財壹伯貫文入福州開元禅寺大蔵経司
雕　鳳　字函妙法蓮華経七卷法華三昧等
経三卷共計一十卷伏茲勝因薦厳超生
浄土時紹興二十一年正月十五日謹題

紹興二十一年＝１１５１

印面状態を調査時ノートに従い、図示すれば、次の通りである。

知恩院蔵：妙法蓮華経巻
第三（左）四（右）　鳳

図版削除

図版削除

『妙法蓮華経』巻六は、板数・面数・柱位置・柱・刻工名の順に記すならば、次の通りである。

紹興戊辰＝紹興十八年・1148

知恩院蔵妙法蓮華経巻第六　鳳

板	面数	柱位置	柱	刻工名
1	6			ナシ
2	6	1・2	鳳 六巻	二　ナシ
3	6	1・2	鳳 六巻	三　ナシ
4	6	1・2	鳳 六巻	四　ナシ
5	6	1・2	鳳 六巻	五　ナシ
6	6	1・2	鳳 六巻	六　ナシ
7	6	1・2	鳳 六巻	七　ナシ
8	6	1・2	鳳 六巻	八　ナシ
9	6	1・2	鳳 六巻	九　ナシ
10	5	1・2	鳳 六巻	十　ナシ
11	6	2・3	鳳 六巻	十一　ナシ
12	6	2・3	鳳 六巻	十二　ナシ
13	6	2・3	鳳 六巻	十三　ナシ
14	6	2・3	鳳 六巻	十四　ナシ
15	6	2・3	鳳 六巻	十五　ナシ
16	6	2・3	鳳 六巻	十六　付
17	6	2・3	鳳 六巻	十七　ナシ
18	6	2・3	鳳 六巻	十八　ナシ
19	2	2・3行	十九尾　陳和造	

印面　2～8、10～15、17～19板＝普通
　　9板＝やや悪
　　16　＝やや良
　　第1板（三行分）＝良

題記三行の次行に当たる箇所の天地横単辺の界線に切れ目がある。さらに、入木の際の削り残しが波状で認められる。明らかに原刻の題記三行を削り新たに紹興戊辰の題記を入木したことが明瞭である。

第16板の印面が比較的良好で明らかに補刻葉（刻工名「付」）である。「鳳」の『妙法蓮華経』は、毎板の版心に刻工名の「ナ」いものが、原刻葉であったか、と想像される。

印面状態を調査時ノートに従い、図示すれば、次の通りである。

知恩院蔵：妙法蓮華経巻第六　鳳

図版削除

切れ目

書陵部蔵宋版大蔵経の『妙法蓮華経』は知恩院蔵『妙法蓮華経』と同版、七十年ほどの後の刷印に係るものである。巻六の印面の磨滅はやや進むが、題記の天地界線の切れ目の位置や波状の削り残しなど施財刊語六行と直前の経本文については、天地界線は連続しているようであり、19板2面分は補刻葉、と推定できる。

書陵部蔵：妙法蓮華経巻第六　鳳

図版削除

書陵部蔵：妙法蓮華経巻第七　鳳

図版削除

書陵部蔵宋版大蔵経の『妙法蓮華経』巻七は、題記三行の天地に存する界線の切れ目の位置も同じで、施財刊語六行と直前の経本文を結ぶ天地界線は連続しているようであり、16板分は補刻葉、と推定できる。刻工名は「王英」である。刻工名を残す葉は、この葉のみであり、あるいは、「王英」の手に係る補刻葉の一段階前に、施財刊語六行のみの改削入木追刻という営為があったのかもしれない。

知恩院（同版の書陵部）蔵妙法蓮華経巻第四の題記・施財刊語をまとめると、第1板第1面三行題記は入木である。巻一を除いて（三行題記と道宣序文が併せて36行6面一板に同時補刻）、巻二以降全て入木で、施財刊語も元来は入木で「魯國太夫人張氏伏遇／…」以下の施財刊語六行を補刻したもの、かと考えられる（巻四）。その更なる補刻は経本文からの連続界線の1板分の補刻葉となる（巻七など）。

施財刊語の問題も、おそらく次のような経過を経ているのであろう。

原刻時は、

「（経本文了）

幾　尾

妙法蓮華経巻第幾　　鳳　」

の如き字配りであったものが、補刻（追刻）時には「幾尾（止）／妙法蓮華経巻第幾　鳳」二行分が削られ、左の傍線部が入木追雕されたのである。

「（経本文了）

魯國太夫人張氏伏遇

亡夫太傳大丞相李公遠忌之辰謹施浄

財壹伯貫文入福州開元禅寺大蔵経司

雕鳳字函妙法蓮華経七巻法華三昧等

経三卷共計一十卷伏茲勝因薦嚴超生
浄土時紹興二十一年正月十五日謹題
幾　尾
妙法蓮華経卷第幾　　鳳　」

という形になる。

知恩院蔵「１３０鳳　妙法蓮華経　紹興戊辰（18年）閏８月題記・21年施財刊語から判明することは、紹興戊辰（18年）１１４８年乃至は紹興21年（１１５１年）以前に刻雕された板木が既に存在していたことである（刻工名「ナシ」として）。しかも、知恩院蔵の刷印時にその磨滅の度合いは、補刻・埋木葉と少々異なる程度であり、原刻葉の甚だしい磨滅による判読不明ゆえの補修の埋木ではない（約五十年以上後の刷印である書陵部蔵本では更なる補刻葉が加わる）。明らかに意図的に題記三行分を削り新たな三行分を入木したのであり、原刻時の版心一行「幾　尾（止）」と尾題「妙法蓮華経卷第幾　　鳳」一行分を削り入木に新たな「魯國太夫人張氏伏遇／…」以下施財刊語六行を追刻したのである。いつ頃の作為刻雕か、この点については事例（二）と併せて後に一括して触れる。

二、開元寺版の問題：改削埋木と補刻・事例（二）
―『大佛頂首楞嚴経』（千字文番号「染」）

書陵部蔵宋版大蔵経ノ内、『大佛頂首楞嚴経』巻一の巻尾は、次の通りである。

天地横単辺の界線の切れ目などに注目し、仔細に検討すると興味深い事実に遭遇する。

書陵部蔵：大佛頂首楞嚴経巻第一　染

図版削除

写真図版の経本文四行目「勿為巳輪廻是中自取流転」（9板）の次行五行目の四字目「□　尾」、更に次行六行目の一字目「大」右部分わずか残存。施財刊語（10板1面1～6行）、尾題は10板1面7行、「九尾」となるが、実際は第十紙に当たる。

おそらく、原刻葉の巻末を表示するならば、

「（経本文了）

幾　尾

大佛頂首楞厳経巻第幾　　染　」

などと配字されていたのであろうか。この「　幾　尾／大佛頂首楞厳経巻第幾　染」二行分を削り取り（削り残しがある）、「右宣教郎充福建路安撫司幹弁公事宗之」以下六行の施財刊語と新たな尾題など一行を追雕した一紙を継ぐという作為が認められるのである。即ち、表示すれば、

追刻・一部改削

「（経本文了）

〈二行分削り取る〉／（一紙継ぐ）

右宣教郎充福建路安撫司幹弁公事宗之

伏遇

母親魯國太夫人張氏慶誕之辰謹施俸資壹

伯貫文入福州開元禅寺大蔵経司雕染字函

大佛頂首楞厳経一十巻伏茲勝因増崇

壽算消災集福紹興十九年三月二十三日題

大佛頂首楞厳経巻第幾　　幾尾　　染　」

となろうか。題記入木の年号は紹興戊辰（紹興十八年・1148）で、施財刊語は紹興十九年（1149）の年紀がある。

巻七の題記三行分も明らかに入木である。天地界線の明瞭な切れ目と段差に注目しなければならない。

図版削除

しかし、巻七には施財刊語がなく、次のようになっている。

書陵部蔵：大佛頂首楞厳経巻第七（尾）　染

図版削除

書陵部（知恩院）蔵『大佛頂首楞厳経』巻一紹興戊辰（18年）閏８月題記・19年施財刊語から判明することは、ここでも紹興戊辰（18年）１１４８年以前に刻雕された板木が既に存在していたことである。しかも、書陵部蔵の刷印時にその磨滅の度合いは、補刻・埋木葉の早いものと少々異なる程度であり、原刻葉の甚だしい磨滅による判読不明ゆえの補修の埋木ではないことも事例（一）『妙法蓮華経』と同様である。明らかに意図的に題記三行分を削り新たな三行分を入木したのであり、原刻時の版心一行「幾　尾（止）」と尾題「大佛頂首楞厳経巻第幾　染」一行分を削り入木に新たな「右宣教郎充福建路安撫司幹弁公事宗之」以下施財刊語六行を追刻したのである。

結び

いつ頃の作為刻雕か、この点については事例（一）と併せて一括して触れるべきであろう。事例（一）（二）の場合は、入木の題記に「福州開元禅寺住持伝法賜紫慧通大師了一」・「紹興戊辰（18年）１１４８年」が共通し、施財刊語では事例（一）「魯國太夫人張氏伏遇／亡夫太傅大丞相李公遠忌之辰」、事例（二）「右宣教郎充福建路安撫司幹弁公事宗之／伏遇／母親魯國太夫人張氏慶誕之辰」とあり、

いずれも「魯國太夫人張氏」を軸にした「遠忌（慶誕）之辰」めぐる施財という営為に行き着くのである。おそらく、「遠忌（慶誕）之辰」の際の福州開元禅寺住持が「伝法賜紫慧通大師了一」であった可能性が高い、ということである。

紹興18年頃に入木を以て修を施す以前の原刻葉は、いつごろの刻雕になるものか、と考えるとき、次の一覧表が参考になろう。開元寺版：知恩院・金沢文庫蔵本などを参照して作成したものである。

宣和3年（1121）	483鐘	法苑珠林　巻21	
宣和6年（1124）	085乃	仏説無量寿経　巻下	宣和6年8月
宣和7年（1125）	088裳	文殊師利所説不思議仏境界経　巻上	
	095陶	大方等大集月蔵経　巻2	宣和7年10月
	095陶	大方等大集月蔵経　巻4	靖康1年1月
	099伐	大方等大集菩薩念佛三昧経　巻1	宣和7年6月
	100罪	大方等集菩薩念仏三昧経　巻3	宣和7年5月
	104湯	寶星陀羅尼経　巻10	宣和7年7月
	105坐	古大方廣佛華厳経　巻4	宣和8年1月
	106朝	古大方廣佛華厳経　巻11	宣和7年9月
	118伏	信力入印法門経　巻2	宣和7年8月
	127歸	四童子三昧経　巻上	宣和8年9月
	129鳴	方広大荘厳経　序　巻1	宣和7年8月
紹興18年（1148）	**130鳳**	**妙法蓮華経　巻1**	
宣和7年（1125）	131在	正法華経　巻3	
	（被）		
靖康1年（1126）	139草	寶雨経　巻1	
	（140木賴及）		

宣和7年12月・8年正月（１１２５・２６）１４３萬　思益梵天問経　巻1
靖康1年（１１２６）１４４方
（蓋此身髪四大五常恭惟鞠養豈敢毀傷女慕貞）
靖康2年（１１２７）１６４絜　不空羂索神変直言経巻21
靖康1年（１１２６）１６４絜　不空羂索神変直言経巻30
（男効才）
建炎1年（１１２７）良　仏説陀羅尼集経　巻8
靖康1年（１１２６）知　観自在菩薩怛嚧多唎随心陀羅尼経
（過）
建炎1年（１１２７）必　成具光明定意経
靖康1年（１１２６）改　稱揚諸仏功徳経　巻上
（得能莫忘罔）
靖康2年（１１２７）談　賢劫経　巻1
靖康1年（１１２６）彼　大法炬陀羅尼経　巻1
（短靡恃己長信使可覆器欲難量墨悲絲）
紹興18年（１１４８）１９６染　大佛頂首楞厳経巻一
建炎1年（１１２７）１９７詩　大毘蘆遮那成仏神変加治持経巻1
（１９８讃羊景行維賢剋）
建炎2年（１１２８）念　菩薩瓔珞本業経　上
（作聖德建名立形端表正空谷傳聲堂）
建炎3年（１１２８）習　瑜伽師地論　巻10
（２２４聽禍因悪積福縁善慶２３３尺璧非寶寸陰是競２４１資父
建炎3年（１１２８）事　大乗荘厳経論　巻13

既に指摘されて久しいが『法苑珠林』などの需要の多い経論などがいち早く開版されたのであろうが、その他の経典は明らかにほゞ年次を踏んで開版されたことがわかる。この一覧表を勘案するならば、千字文番号・鳳（130）『妙法蓮華経』は、おそらく宣和7年（1125）乃至は靖康元年（1126）頃の刊行に係るもので、この原刻葉に伝法賜紫慧通大師了一が福州開元禅寺住持の時期に当たる紹興21年（1151）に「魯國太夫人張氏」乃至それに連なる縁者が係わって追刻（一部改刻）がなされたものであろう。「王英」の補刻葉は紹興21年以降の補刻葉の可能性も出てくる（王英についての詳細は別稿の予定）。

千字文番号・染（196）『大佛頂首楞厳経』は、おそらく靖康1年（1126）乃至は建炎元年（1127）頃の刊行に係るものと推せられる。千字文番号・鳳（130）『妙法蓮華経』と同じ縁を以て紹興19年（1149）の追刻（一部改刻）を経たものが日本に舶載されたようで現存の開元寺版は勿論すべて原刻葉を失っているのである。とりわけ、この両経が選択されたことは、南宋の福州における具体的な信仰の一事例として留意すべきであろう。

附①、開元寺版に五面一紙一板が二か所に存する事例

今回の事例を検討する過程で五面一板一紙が同一帖に二か所（中程の板と最末板から二番目の板）あるケースの生成過程を考えることができたので報告する。

繰り返すことになるが、知恩院蔵『妙法蓮華経』巻第四の書誌情報を記す。板数・毎板面数・柱位置・柱題・刻工名の順）。

知恩院蔵妙法蓮華経巻第四　鳳

板	面数	柱位置	柱	刻工名
1	6	ナシ		
2	6	1・2	鳳 四巻	二　ナシ
3	6	1・2	鳳 四巻	三　ナシ
4	6	1・2	鳳 四巻	四　ナシ
5	6	1・2	鳳 四巻	五　ナシ
		（印面：やや悪）		
6	6	1・2	鳳 四巻	六　ナシ
7	6	1・2	鳳 四巻	七　ナシ
8	6	1・2	鳳 四巻	八　ナシ
9	6	1・2	鳳 四巻	九　ナシ
		（印面：かなり悪）		
10	**5**	**1・2**	**鳳 四巻**	**十　ナシ**
11	6	2・3	鳳 四巻	十一　ナシ

12	6	2・3	鳳	四巻	十二　ナシ
13	6	2・3	鳳	四巻	十三　ナシ
14	6	2・3	鳳	四巻	十四　ナシ
15	6	2・3	鳳	四巻	十五　ナシ
16	6	2・3	鳳	四巻	十六　ナシ
17	6	2・3	鳳	四巻	十七　ナシ
18	6	2・3	鳳	四巻	十八　ナシ
19	6	2・3	鳳	四巻	十九　ナシ
20	5	1・2	二十		
21	2	2・1行	二十尾	陳和造	

知恩院蔵『妙法蓮華経』巻第四の原刻時（宣和7年頃・復元）巻尾の印面状態と削り取り・入木・追雕時（紹興20年頃）巻尾の印面状態を並記するならば、次のようになろう。原刻時は、

「（経本文了）　＝　20板5面第6行
「　　幾　尾　　＝　20板6面第1行
妙法蓮華経巻第幾　　鳳」

となり、20板6面で了となるものである。

補刻（追刻）時は、

「（経本文了）　＝　20板5面第6行
魯國太夫人張氏伏遇　＝　21板1面第1行
亡夫太傳大丞相李公遠忌之辰謹施浄
財壹伯貫文入福州開元禅寺大蔵経司
雕鳳字函妙法蓮華経七巻法華三昧等
経三巻共計一十巻伏茲勝因薦厳超生
浄土時紹興二十一年正月十五日謹題
　　幾　尾　　＝　21板2面第1行
妙法蓮華経巻第幾　　鳳」

となり、20板（即ち21板の巻尾より二番目の板数）は、5面一板一紙の葉となり、21板第2面で了となる。第10板と第20板の二か所に五面一紙一板が存する事例となるのである。

さらに興味深い事例がある。知恩院蔵『妙法蓮華経』巻三も知恩院蔵『妙法蓮華経』巻第四と同様に巻尾の18板の直前の17板が五面一紙一板の例であるが、一二六〇年頃将来・直前の刷印と推定される後修印本の書陵部蔵同経同巻では、逆に17板が6面一紙一板で了となるケースである。「魯國太夫人張氏伏遇」以下六行の施財刊語がないのである。

『妙法蓮華経』巻三
知恩院蔵　　書陵部蔵

板	面数施財	施財	刻工名	刻工名

1　6　ナシ　府城後街信女鄭十娘捨二片保安
2　6　ナシ　浚　住古田保福比丘浄瑜捨
3　6　ナシ　閩縣永福里信女林氏徳永祈保平安捨
4　6　ナシ　ナシ
5　6　ナシ　浚　住古田保福比丘浄瑜捨
6　6　正　日本国明仁捨換
7　6　言　福清縣安平北里陳氏五娘捨銭換刊
8　6　ナシ　福清縣安平北里林応忠為考生界捨銭刊
9　5　ナシ　福清縣安平北里陳佛顕神顕各与室捨銭刊
10　6　ナシ　淳祐甲辰局司重換
11　5　ナシ　ナシ
12　6　ナシ　閩縣永福里信女林氏徳永祈保平安捨
13　6　ナシ　ナシ
14　6　ナシ　ナシ
15　6　ナシ　泉州城南廂蒋五娘捨
16　6　ナシ　ナシ
17　5　ナシ　（6面）ナシ
18　6　ナシ　（18板は存せず）

知恩院蔵本は17板5面で本文了、18板第1面第1行～6行分低2格「魯国太夫人…」以下の施財刊語があり、18板第2面第1・2行「十七尾　陳和造／尾題」を以て終了となる。一方、書陵部蔵本は17板5面で本文了・17板第6面第1・2行「十七尾／尾題」で終了となる。知恩院蔵本の印面は、2～5、12～16板＝普通で1・9～11＝かなり悪く、6～8・17・18＝やや良、との判断が可能であり、書陵部蔵本の印面は、2・3・5・12・17＝普通で、4・11・13・14・16＝かなり悪く、1・7・8・9・10・15＝やや良い、さらに6＝かなり良好である。

附②、思渓版巻首題記空白（一行～三行）―未刻―の事例

既に「思渓版大般若波羅蜜多経・沙石集―渡辺氏への報告」と題した発表を行い（水門の会・東京例会、於大東文化大学、二〇一二年一月八日）、「思渓版大般若波羅蜜多経と開元寺版大蔵経　――その版式上の接点について（1）」（『水門』24号　2012・10）として活字化したが、その末尾に「いま一点については「思渓版『摩訶般若波羅蜜経』〔題記三行分〕白紙をめぐって」と題した別稿」予定としたが、思渓版の巻首（開元寺版などの題記該当部分）一行乃至二、三行を空けるケースは摩訶般若波羅蜜経』に止まらない。ここに現時点で確認し得た事例を五面一紙一板の混在を指摘しつつ列記するが、いずれも開元寺版未刷（刻？極めて多い）と思渓版空白の巻首の関係を考える上で看過することのできない事例である。

増上寺蔵宋（思渓）版大蔵経

大方廣佛華厳経巻第五十三　垂　第一板一面　2・1㎝幅空白

大方廣佛華厳経巻第六　座　第一板一面　4・6㎝幅空白

図版削除

大方廣佛華厳経巻第五十四　垂　第一板一面　1・7㎝幅空白

大方廣佛華厳経巻第七　座　第一板一面　3・5㎝幅空白

増上寺蔵大方廣佛華厳経巻第一　第一板一面5・0㎝幅空白（三行分）

	板面数	柱位置	柱・刻工名	
1	6	1・2		一	何忠
2	6	1・2	坐	花厳巻一	二	何忠
3	6	1・2	坐	花厳巻一	三	何忠
4	6	1・2	坐	花厳巻一	四	何忠
5	6	1・2	坐	古花厳巻一	五	何忠
6	6	1・2	坐	古花厳巻一	六	何忠
7	**5**	**1・2**	**坐**	**古花厳巻一**	**七**	**何忠**
8	6	右端糊代（透見）	坐	古花厳巻一	八	何忠
9	6	1・2（外向）	坐	古花厳巻一	九	何忠
10	6	1・2（外向）	坐	古花厳巻一	十	何忠
11	6	右端糊代（透見）	坐	古華厳	十一	ナシ
12	6	1・2（外向）	坐	古花巻一	十二	ナシ
13	3					

増上寺蔵大方廣佛華厳経巻第四十九　第一板一面空白ナシ

板面数柱位置柱・刻工名

1	6	1・2		屠有
2	6	右端糊代	垂	四十九巻	二	屠
3	6	1・2	垂	四十九巻	三	ナシ

4	6	1・2	垂	古花四九巻	四	■（？）
5	6	1・2	垂	古華四十九	五	ナシ
6	6	1・2	垂	古花四十九巻	六	ナシ
7	**5**	**右端糊代**	**垂**	**古花四十九巻**	**七**	**崔**
8	6	右端糊代	垂	四十九	八	盧■（？）
9	6	右端糊代	垂	四十九巻	九	兪
10	6	右端糊代	垂	四十九巻	十	ナシ
11	6	右端糊代	垂	四十九巻	十一紙	ナシ
12	6	右端糊代		古花四十九	十二紙	盧■
13	5	4・3行下				魚宗

増上寺蔵大方廣佛華厳経巻第六　第一板面4・6cm幅空白（三行分）

板	面数	柱位置	柱・刻工名		
1	6	1・2		一	ナシ
2	6	1・2	坐	古花巻六	二	屠有
3	6	1・2	坐	花厳巻六	三	屠有
4	6	1・2	坐	古花巻六	四	屠有
5	6	1・2	坐	古花巻六	五	屠有
6	6	1・2	坐	古花巻六	六	屠有
7	6	1・2	坐	古花巻六	七	屠有
8	6	1・2	坐	古花巻六	八	屠有
9	6	1・2	坐	古花巻六	九	張海
10	**5**	**1・2**	**坐**	**古花巻六**	**十**	**張海**
11	6	2・3		古花六巻	十一	張海
12	6	1・2	（外向）坐	六巻古花	十二	張海
13	6	1・2	（外向）坐	古花六巻	十三	張海
14	6	1・2	（外向）坐	古花六巻	十四	張海
15	6	1・2	（外向）坐	古花六巻	十五	張海
16	3	1・2	（外向）	古花巻六	十六	張海

増上寺蔵大方廣佛華厳経巻第五十四　第一板一面2・1cm幅空白（二行分）

板	面数	柱位置	柱・刻工名		
1	6				
2	6	1・2	垂	古花五十四	二	李
3	6	1・2	垂	五十四	三	ナシ
4	6	1・2	垂	五十四巻	四	ナシ
5	6	右端糊代	垂	古花五十四	五	ナシ
6	6	1・2	垂	五十四	六	陳
7	6	右端糊代	垂	古花五十四巻	七	盧廣
8	6	右端糊代	垂	古花五十四巻	八	ナシ
9	**5**	**1・2**	**垂**	**五十四**	**九**	**李**
10	6	1・2（外向）	垂	古花五十四巻	十	ナシ

11	6	右端糊代	垂	古華五十四	十一　陳昇
12	6	右端糊代	垂	古花五十四巻	十二　廬廣
13	6	右端糊代	ナシ	古花五十四巻	十三　廬廣
14	6	右端糊代	垂	古花五十四巻	十四　廬
15	6	右端糊代	垂	古花五十四巻	十五　廬
16	6	右端糊代	垂	古花五十四	十六　ナシ
17	6	右端糊代	垂	古花五十四巻	十七　廬
18	2				

増上寺蔵漸備一致智徳経巻第一

	板	面数	柱位置	柱・刻工名	
1	6	1・2	ナシ	ナシ	陳浩
2	6	1・2	戎	智徳巻一	二　陳浩
3	6	1・2	戎	巻一	三　翼鑾氏
4	6	1・2	戎	智徳巻一	四　徐■
5	6	1・2	戎	智徳巻一	五　牛志
6	6	1・2	戎	智徳巻一	六　牛志
7	**5**	**1・2**	**戎**	**智徳巻一**	**七　牛志**
8	6	1・2	(外向)戎	智徳巻一	八　牛志
9	6	1・2	(外向)戎	智徳巻一	九　牛志
10	6	1・2	(外向)戎	智徳巻一	十　牛志
11	6	1・2	(外向)戎	智徳巻一	十一　牛志
12	6	1・2	(外向)戎	智徳巻一	十二　牛志
13	6	1・2	(外向)戎	智徳巻一	十三　牛志
14	6	1・2	(外向)戎	智徳巻一	十四　牛志
15	6	1・2	(外向)戎	智徳巻一	十五　牛志
16	6	1・2	(外向)戎	智徳巻一	十六　牛志
17	3	十七紙			■■

戎　漸備一切智徳経巻第一（全17板6面、⑦板5面）
首3行分空白
戎　漸備一切智徳経巻第二（全17板6面、⑬板5面）
首3行分空白
戎　漸備一切智徳経巻第三（全20板6面、⑬板5面）
首3行分空白
戎　漸備一切智徳経巻第四（全17板6面、⑬板5面）
首3行分空白
戎　漸備一切智徳経巻第五（全17板6面、⑬板5面）
首3行分空白
鞠　月燈三昧経巻第一（全板6面）首3行分空白
鞠　月燈三昧経巻第二（全板6面）首3行分空白
鞠　月燈三昧経巻第三（全板6面）首3行分空白
鞠　月燈三昧経巻第四（全板6面）首3行分空白
鞠　月燈三昧経巻第五（全板6面）首3行分空白

鞠　月燈三昧経巻第六（全板６面）首３行分空白
鞠　月燈三昧経巻第七（全板６面）首３行分空白
鞠　月燈三昧経巻第八（全板６面）首３行分空白
鞠　月燈三昧経巻第九（全板６面）首３行分空白
鞠　月燈三昧経巻第十（全板６面）首３行分空白
鞠　月燈三昧経巻第十一（全板６面）首３行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第一（全板５面）首３行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第二（全板５面）首２行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第三（全板５面）首３行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第四（全板５面）首３行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第五（全板５面）首３行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第六（全板５面）首１行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第七（全板５面）首３行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第八（全板５面）首１行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第九（全板５面）首３行分空白
河　光讃般若波羅蜜経巻第十（全板５面）首３行分空白
ＥＸ・薑摩　訶般若波羅蜜経巻第一（全板５面）
首３行分空白

以上、事例を挙げるに止める。

＊　＊　＊

本稿は科研基盤研究（Ｂ）（課題番号２２３２００５２）の資金援助による研究成果である。既に口頭発表「宋版大蔵経：五面一板と入木―思渓版の版式をめぐって」（第三回宋版研究会　２０１２・12・25　於立正大学）、「日本現存資料から見た宋版大蔵経の〈修〉について―「入（埋）木」などを手がかりに―」（国際シンポジウム「中世の禅宗文化とその周辺」　２０１３・３・15　於知恩院）において発表報告を終えたものが多いが、近く講演予定の「南宋刊本と鎌倉時代刊本―泉涌寺版に限って」（２０１３・９・14～16（於杭州）開催予定国際シンポジウム）の一部も含まれている。また、関連するものとして、牧野「日本中世の寺院における出版、その背景と逓蔵過程の一、二の事実」（『アジア遊学』近刊所収予定。挑戦的萌芽研究〈課題〉番号２４６５０４９の助成に拠る）もある。御参照願えれば幸いである。

此度も貴重な典籍熟覧調査に引き続き御高配を賜りました知恩院当局、度々の熟覧調査に御厚情を頂きました宮内庁書陵部・増上寺当局に深く御礼申し上げます。また書影掲載に御許可を頂きました書陵部当局に深謝申し上げます。

（まきの　かずお・実践女子大学教授）